

# つれづれの『結び方』

——徒然草二三五段のわからなさの「解」——

櫻井靖久

## 一、二三五段のわからなさ

徒然草二三五段の文章は不思議な章段である。一つ一つの文章の意味は難しくなく、理解することができる。しかし、章段全体で何を意味し、意図しているかがわからない。

古注である「寿命院抄」では、

此ノ段ハ心性ヲ論ズルナリ。尤モ眼ヲツクベキナリ。<sup>(1)</sup>

と説かれており、他の古注にもいろいろと論ぜられているが、その内容になかなか納得すべきものは出ていない。現在の注釈では、むしろあつさりとした解釈と注釈ですませていくけれども、それも何となく違うのではないかという印象を与える。

二三五段の本文と現代語訳を三木紀人から引用する。<sup>(2)</sup>

ぬしある家には、すずろなる人、心のままに入り来る事なし。あるじなき所には、道行き人みだりに立ち入り、狐・ふくろふやうの物も、人げに塞かれぬれば、所得顔に入りすみ、木霊などいふけしからぬかたちもあらはるものなり。

また、鏡には色・形なきゆゑに、よろづの影来りて映る。鏡に色形あらましかば、映らざらまし。

虚空よく物を容る。我等が心に念々のほしきままに来り浮ぶも、心といふもののなきにや。心にぬしあらましかば、胸のうちに、そこばくことは入り来らざらまし。

(現代語訳) 主人がいる家には、無関係な人が心まかせに入り込むことはない。主人がいない所には、行きずりの人がむやみに立ち入り、狐やふくろうのような物も、人の気配に妨げられないので、わが物顔に入つて住み、木の霊などという、奇特な形の物も出現するものである。

また、鏡には、色や形がないので、あらゆる物の影がそこに現われて映るのである。鏡に色や形があれば、そのように、物影が映るまい。

虚空は、その中に物を存分に容れることができる。われわれの心にさまざまの思いが気ままに現われて浮かぶのも、心という実体がないからであろうか。心に主人というものがあれば、胸のうちに、これほど多くの思いが入ってくるはずは

ない。

特に難しい語句や言い回しもなく一つ一つの文は理解出来る。

そして全体が三段に分かれていることも読み取れる。しかもその第一段は『源氏物語』「蓬生」末摘花の屋敷の描写に基いて叙述したものである。

「蓬生」を引用すると、

もとより荒れたりし宮の内、いと狐の住み処になりて、うとましうけ遠き木立に、梟の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬ物ども、ところ得て、やうやう形をあらはし、

兼好の文章は、源氏物からキーワードをいくつか借りて、一つの別の意味を持つ文章になっている。しかも教養ある人が見れば、源氏物語を下書きにしたとわかる文章である。これはこれで一つの文章技術であろうが、一方で、兼好ならば似た意味で独自の文章を書けるであろうのに、わざわざ透き写しのような文章を書くのであろうかという疑問も出て来る。因みに「梟」「木霊」の用例は、徒然草はこの段のみである。「狐」は他に二例用例がある。

この二三五段に題名をつけている注釈書がある。この三木紀人の注は「ぬしある家」と第一文を題にする。松尾聡も「主ある家には」である。一方で全体の内容からとつたものに、木藤才蔵「虚空よく物をいる」とあり、久保田淳は「心の実態の有無について」とする。島内裕子は「評」において、「心について正面から思索を凝らした、注目すべき段である」とする。松尾聡は「この段の主題は何であるかはつきりしないので、古来いろいろむずかしい議論がある」という。現在では、この段は、「兼好が心の実

態について述べたもの」と考えられているようである。

## 二、「古注」「新注」の注釈を読む

二三五段の一つ一つの文章と現代語訳は理解した。それでは、この章段の意図は何であるかを諸注の注釈によってみる。

古来、難解なものと思われる。大全には、第三十八段、第九十七段、第九十八段とともに、兼好知恵をふるいて書ける眼なりとし、大成にも、「容易に看破すべからず」と、さじを投げた形になっていて、いわば買いかぶられている(橘)が、こういう心の相は、兼好独自のものではなく、当年の仏徒がよく記しているところであつて(富倉、公平にみれば、それほど大したものではない(佐野)。おしつめてみて、「心に主、信念さえあれば、外界の事情によって心が乱れることはない(佐野、佐成、岸)、「心は本来の無に帰るべく、空家の如くあるべからず(橘)」と解される。「不可解なもの心であるという禅宗の悟りめいたものがあるかもしれない(橘)」。けれども雑念や妄想が浮かぶのは、心が「虚」だからで、万象が心の鏡に映るのも、そのためにちがいないと思いついたものに過ぎないのであろう。(中略)「何等の結論もない、教訓もない、人間心理の不思議さにただ思い入っているもので、空家、鏡、虚空などの例から、心も同様に、実体のないものかと考えついて、それを奇想外な興ある一つの発見として書き記しておいたのではなからうか(富倉)」。

「古注」といわゆる「新注」の落差は、はなはだしいものがあ

る。古注の注目度の強さ「兼好が知恵をふるって書ける（徒然草）の眼（目）である」とするのに対して、新注は「結論なく、教訓なく、心理の不思議さを大げさに書いただけで大したものではない」とする。その評価は天地のように分かれるけれども、共通しているのはわからなさである。たとえとして使われている「空家とは何か」「鏡とは何か」「虚空とは何か」「心とは何か」ということが、この注釈で今一つはつきりと浮かんでこない。

安良岡の解説に従って、本文の文脈をたどって見る。

第一段落では、「主ある家」と「主なき所」とを対置して、「主」の有無によって、外なる人や物がやたらに入ってくるか、否かという結果になることを述べている。「すぐろなる人」とか、「道行人濫りに」とか、「木霊などいふ、けしからぬ形」とかいつているのであるから、この外から入りこむ人や物は、否定されるべき存在であることは明らかである。

それが、第二段落では、「鏡」と「万の影」との問題となっている。そして、鏡の鏡たる所は、自身の「色・像」のないことにもとづくとして、第一段落の「主なき所」に認められるのと同じ事実を、この鏡の万象を映し出す働きの上で考えられている。

第三段落では、「家」と「鏡」について言ったことを「虚空」につき考え、「虚空よく物を容る」と述べているのは、第三の例であるが、以上の三つの例をもとにして、人の「心」を問題にし、その「心」に、「念々」の「ほしきまゝ」に「生起するもの、実は、「心」に真に主体がないのではないかと懷疑しているのである。それは、人間が次々に生起して止ま

ない「念々」に動揺され、左右されて迷乱している事実への反省であって、兼好は、そういう「念々」の生起を、第一段落における外來の人や物のように、否定されるべきものと考えているように思われる。三つの例のうち、「鏡」と「虚空」については、単なる現象・事実として挙げただけであって、「心」と「念々」との関係は、第一段落の「家」と「すぐろなる人」とのそれと同じものと考えているようである。（中略）

兼好が、当時としては稀な、人間心理の観察者・分析者であったことは、上巻以来、しばしば認められて来たのであるが、ここでは、それが、「心に主あらましかば」とあるように、自己を確立しようとする意志と結びついて追求されていることが注意されなくてはならないだろう。自己が真に自己の主人となり、自己の統率者となることの難かしさが、この段の基底をなしているのだから。

この解説を読んで、この段のわからなさの理解が進むかと言へば、やはりわからない、としか答えられない。ただ、最後の「心に主あらましかば」の強調が印象に残る。

それでは、次に「心に主あらましかば」の文章を考える。

### 三、兼好と「反実仮想」の意識

「心にぬしあらましかば、胸のうちにそこばくのことは入り来らざらまし。」（心に主人というものがあれば、胸のうちに、これほど多くの思いが入ってくるはずはない。）

これは推量の助動詞「まし」の未然形に、接続助詞の「ば」がついた形で、多くは文の終わりを同じく「まし」で受けて止め、「反実仮想」の働きをする。『岩波古語辞典』では次のように説明する。<sup>11)</sup>

現実の事態(A)に反した状況(非A)を想定し、「それ(非A)がもし成立していたのだつたら、これこれの事態(B)が起こったことであろうに」と想像する気持ちを表明するものである。世に多くこれを反実仮想の助動詞という。

(中略)「まし」は動かし難い目前の現実を心の中で拒否し、その現実の事態が無かった場面を想定して、その場合起るであろう気分や状況を心の中に描いて述べるものである。

この章段には「ましかば……まし」がもう一つ使われている。

「鏡に色形あらましかば、映らざらまし。」

二三五段のような短い章段に、二例も「ましかば……まし」の用例があるというならば、兼好はこの用法が気に入って多用していたかという点、そうではない。徒然草全体の中で、わずか五例しか使われてはいない。他の三例の用法を掲げる。

#### 第十一 段の用例

……大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

#### 第三二 段の用例

……なほ事ざまの優に覚えて、物の隠れよりしほし見ぬたるに、妻戸を今少しおしおかけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。あとまで見る人ありとはいいかでか

知らむ。

#### 第六〇 段の用例

この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何物ぞ」と人の問ひければ、「さる物を我も知らず。若しあらましかば、この僧の顔に似てむ」とぞいひける。

いずれもよく知られている段のエピソードである。しかも特徴的なことは、それらの段の話の中で、「ましかば……(まし)」が効果的にかつ用法の機能を十分發揮させていることである。これらの文章が平叙文で書かれていたら、我々にもこんなにも爽やかな印象を残してはいない。兼好は「反実仮想」の機能をよく理解していたと思われる。そして、むやみやたらと使わず、ここぞという所で使っていたと考えられる。

因に『兼好歌集』では、「せば……まし」の形で二首出ており、兼好自身のものは一首しかない。<sup>12)</sup>

なお、兼好自身は鎌倉時代後期である南北朝という中世に生きているので、「ましかば……まし」という平安時代の中古の語法は、かなり気取った物いいであり、結果的に文章を強調するといふ言い方になったと考えられる。

同時に、徒然草全体で「ましかば……まし」の用例が五例で、その二例が二三五段にある。他の用例とは違い、二三五段の用例は効果的とはいえない(見えない)のではあるけれども、兼好自身としてはかなり気負って書いた、強調して書いた、力を入れた段であるに違いない。

あらためて二三五段全体を振りかえると、構成段落の第一段は、源氏物語の透き写しとも言える内容であり、第二段の末尾は「ま

しかば……まし」、第三段の末尾も「まししかば……まし」となっている。この章段の内容は今一つ理解できないながらも、わずかな十行程度の文章に、こんなにも様々なものをコンパクトに詰め込み、兼好自身が気負い、強調した段があるだろうか。そこには何か、兼好の重要な意図が含まれていると私は考える。

#### 四、二三五段の意味とその意味による分類

二三五段は三つの段落に分かれている。そして前に見たように、第一段は『源氏物語』を下書きにした術学的な趣味を持つ文章であり、第二段と第三段は「まししかば……まし」の強調した、いわば突出した文章となっている。そうすると、これは一つの文章として「初・中・終」という構造を持つ文章ではなく、それぞれ三つの段落が独立した、並行、即ちパラレルで交錯することのない文章なのではないだろうか。三つの文章は、それぞれ関わることのない独立の三文を並べているのではないか。

そして注目すべきことは、この段に、序段の「つれづれ」の關係を読みこむ注があることである。例えば、三木紀人は『よろづの影来りて映る』あたりは、序段の『心にうつりゆくよしなしごと』を思い出させる<sup>13</sup>と言う。更に、ここで確認しておくべきことは、この二三五段は、晦渋な文章ではあるけれども、その内容は兼好自身が自分の考えを表明した文章であること。徒然草の最後の章段群に属する文章であること。また、この章段の文章の内容が、三つのパターンとして並行していることがあげられる。そのこと全てを総合的に考えた場合の結論は、この段は、この

前までの徒然草二三四段を書き終えて、振り返った時の感慨を述べた文章であり、ここまで書いてきて、兼好が感じた文章のタイプの三パターン、即ち三つのジャンルを述べたものではないだろうか、ということである。具体的に言えば、第一段では「あるじなき家」での「けしからぬかたち」、即ち「不思議」を書き、第二段では「鏡」の「よろづの影来りて映る姿」、即ち「自身が鏡となる聞き書き」を書き、第三段では「心にぬしある姿」、即ち「聖・上人の姿」を書いた、と考えられる。更にジャンルとしてわかりやすく言えば、第一段は「怪奇・不思議譚」、第二段は「聞き書き・事実譚」、第三段は「聖・上人等、神仏発心譚」に分けられる。なお、「名人譚」は第一段に含めることにする。

そうすると、徒然草全体の章段は、次の様に分類される。以下、数字は段名である。

##### 第Ⅰ類 怪奇・不思議、名人譚

8 9 40 50 51 53 68 89 92 109 110 126 145 146 185 186 206 207 230

##### 第Ⅱ類 聞き書き・事実譚

1 2 3 10 11 12 13 14 15 16 19 21 22 23 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 41 43  
 44 48 52 54 55 56 57 61 62 63 64 65 66 67 70 71 72 73 76 77 78 79 80 81 82 83 85 86 87  
 88 90 94 95 96 97 99 100 101 102 103 104 105 107 113 114 116 117 118 119 120 121 125 127 128 132 133 135 136  
 137 138 139 147 148 149 150 151 152 153 154 156 158 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 172 173 174 175  
 176 177 178 179 180 181 182 183 184 187 189 190 191 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 208 209 210  
 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 231 232 233 234

##### 第Ⅲ類 聖・上人等、神仏発心譚

4 5 6 7 17 18 20 24 28 39 42 45 46 47 49 58 59 60 69 74 75 84 91 93 98 106 108 111 112  
 115 122 123 124 129 130 131 134 140 141 142 143 144 155 157 171 188 192

人によつては、この分類の章段に多少の入れ替えがあるかもしれない。しかしそれでも、内容的にはこの三つの分類に収束する筈で、その外に出ることはない。

興味深いのは、この三つの分類の観点から徒然草の章段を見直すと、特に初めの方の章段に特徴が見られることである。例えば、2段は第Ⅱ類と第Ⅲ類の未分化がある。4567段は第Ⅲ類の神仏論の初期的文章の趣がある。同様に、89段は第Ⅰ類の怪異・不思議譚の初期的文章の趣があり、10111213段には第Ⅱ類の事実譚の初期的文章の趣が見られる。

ここで思い出すのは、西尾実の文章である。

第三十段あたりまでの無常感、世の中が無情であることを悲しんでいる感傷的な生活感情としての無常感であり、詠嘆的な無常感である。(中略)ところが第三十一段以後になると、この詠嘆のものが消えて、何をとりあげても澄んだ秋の空のもとでもものの形や色を見、ものの音や響きを聞くように、きわめてはつきりと澄みきつてくる。くわしく読み進めてみると、その根源はこの作者主体の無常感そのものの変化にあることが見いだされる。

このことを私の今までの流れで言いかえるならば、兼好は徒然草の序段から三十段までを、思い出すままに、あるいは思いつままに、全体の構想とは無意識のうちに書き出していた。そして、三十段を過ぎるほどから、それぞれの章段を意識的にジャンル毎に書き分けるようになった、と考えられないうか。一つ一つの章段を思いつのは、つれづれであったかもしれないが、書く上での手法と意識は三つに分化されていったのではないかと私

は考える。

## 五、徒然草全体の構造から見た二三五段

前段までの過程の流れを考えて見るならば、この第二三五段の位置は、徒然草全体の「後書き」ではないか、との疑問が起きてくる。内容が晦渋でよくわからない章段の時には見えなかったけれども、内容的に序段の「つれづれ」を受け取める章段であり、兼好が回想的に徒然草の文章を三つのジャンルに分けたものと考ええるならば、正しく兼好らしいともいえる「跋文」なのではなからうか。徒然草の全体構成の考えから考えると、少なくとも現在の二四三段の「八つになりし年」は、内容が全体に関わらない一つのエピソードの章段に過ぎない。それに比べて、二三五段は内容に最終段としての必然性を持たせた「跋文」となっている。もちろん内容的に「八つになりし年」が悪いといっているのではない。これはこれで、徒然草の章段として読まれるべき内容を持っている。そういう意味ではなく、位置として、そして徒然草の構造として、最後尾を語るものであるか、ということである。私は「つれづれ」の首尾照応から、兼好は二三五段を最後として、徒然草を一応閉じたものと考ええる。

それでは、二三六段以下は何かと言えば、追記、追加であり、拾遺であったと考える。例えば、一三八段の「兼好自讃の事七つ」は、そういう眼で見るとすれば、本来は一段一段にあたるエピソードが続けて七つ連続的にまとめてあり、いかにも追加メモのような形である。そしてその中で「八つになりし年」を置かならば、

追記の章の「まとめ」として、しっかりと位置を占めているように見える。一方でこの二四三段を全体の徒然草のまとめと考えると、いかにも力不足で、徒然草の章段全体にまとめり（求心力）があるようには見えない。

古注にも、二四三段の位置について書かれたものがある。

玄旨法印曰、此ノ段ハ「ツレヅレ」一部ニモラシノコセル事ヲ此ノ所ニ書ツクタリト見ルベシ<sup>15)</sup>

少なくとも、徒然草の構造論という視点に立てば、同様の結論に導かれるだろう。

現在の徒然草の構造論の流れは知らない。私としては二三五段の内容から、兼好が構想したであろう、三つのジャンルの枠を提出して、それを徒然草全体にあてはめ、全てが三つのジャンルに収束することを確かめた。更に序段の「つれづれ」が二三五段に反映して跋文になることを指摘した。そしてそれが第一次編集であり、二二六段以下は追記になるに違いないという説を、私はここで提出する。

### 注

(1) 三谷栄一・峯村文人『徒然草解釋大成』昭和四一年岩崎書店二八四頁

(2) 三木紀人『徒然草(四)』講談社学術文庫一九八二年二〇

九頁

(3) 注2

(4) 松尾聡『徒然草全釈』二〇〇四年清水書院四二六頁

(5) 木藤才蔵『新潮日本古典集成 徒然草』昭和五二年二四四

頁

(6) 久保田淳『新日本古典文学大系 方丈記 徒然草』一九八九年岩波書店三〇二頁

(7) 島内裕子『ちくま学芸文庫 徒然草』二〇一〇年筑摩書房四四七頁

(8) 注4

(9) 田辺爵『徒然草諸注集成』昭和四四年右文書院六六〇頁

(10) 安良岡康作『徒然草全注釈下巻』昭和四三年角川書店四九三頁

(11) 『岩波古語辞典』一四三九頁

(12) 西尾実『兼好法師家集』岩波文庫二〇〇七年

兼好(二一頁)

三四つきもせぬなみだの玉のなかりせばよのうさかずにをとらまし

道我僧都(二九頁)

六八かぎりしるいのちなりせばめぐりあはん秋ともせめてちぎりをかまし

(13) 注2

(14) 西尾実『日本古典文学大系 方丈記 徒然草』昭和四六年岩波書店六八〜六九頁

(15) 注1(大全) 高田宗賢一三四二頁

(さくらいやすひさ 元神奈川県立高等学校長)